

カラフトアオアシシギ *Tringa guttifer* (Nordmann)

【選定理由】

東アジアのみに分布する種であり、生息数の極めて少ない国際的希少種である。生息地全般の環境悪化が進行しており、絶滅の危機に瀕している。県内では西尾市一色地区、矢作川河口周辺、汐川干潟、名古屋港周辺などで年により記録されるが、近年は干潟の環境悪化や後背湿地の消失により、飛来は極めて希となっている。

【形態】

全長 30cm。夏羽は上面が黒褐色に細かい白斑、頸から胸にかけて大きめの黒斑がある。幼羽は上面が褐色で、淡褐色の羽縁があり、胸の黒斑はない。アオアシシギに似るが嘴は太く頭は大きめ、足はやや短く黄色味が強い。外趾内側と内趾内側の両方に蹼がある。



愛知県豊橋市, 2003年9月23日, 杉山時雄 撮影

【分布の概要】

【県内の分布】

春秋に伊勢・三河湾沿岸の干潟や干拓地、埋立地などの塩水から汽水、淡水の水辺や湿地に飛来する。

【国内の分布】

旅鳥として春秋の渡りで飛来し、全国の干潟、沿岸部の湿地などに生息する。

【世界の分布】

サハリン、アムール川河口周辺、カムチャツカなどで繁殖し、マレー半島、スマトラ島、タイ、バングラデシュなどで越冬する。

【生息地の環境／生態的特性】

干潟を好む種ではあるが、満潮時には干拓地や埋立地の湿地などに生息する。単独で飛来することがほとんどで、愛知県に複数で飛来した例は 1981 年 8 月の 1 群 6 羽のみである。秋季の記録の多くは幼鳥であるが、擦切れた夏羽の成鳥が飛来して冬羽に換羽した例（写真）もある。春の渡りでは新鮮な夏羽の個体が観察されるが、春の記録は 2 例のみである。

【現在の生息状況／減少の要因】

2002 年前後の知見では繁殖地として知られるサハリン周辺で僅か 30～40 番いが確認されるに過ぎないとされていたが、その後カムチャツカなどでも少数の繁殖が確認されている。しかし、渡りの中継地や越冬地での確認状況から、生息数が減少していることは否定できず、現在の生息数はヘラシギと同程度ではないかと推測される。減少の要因として、繁殖地では環境悪化、カラス類などによる捕食圧などが指摘されており、渡りの中継地でも環境が悪化している。県内の記録は西三河沿岸部や汐川干潟などに集中するが、干潟面積の減少や干潟環境の悪化と共に、後背に位置する汽水や淡水湿地の消失により、近年の飛来はごく希となっている。最近では、2016 年 9 月に名古屋市庄内川河口で幼鳥 1 羽が観察されている。

【保全上の留意点】

県内に残された干潟の周辺に汽水や淡水の後背湿地を復元し、安定した渡り中継地の確保に努める必要がある。

【特記事項】

本種は、種の保存法で国内希少野生動植物種に指定されている。

【関連文献】

真木広造・大西敏一・五百澤日丸, 2014. 決定版 日本の野鳥 650, p.262. 平凡社, 東京.
N.N.Gerasimov, 2004. 極東の鳥類 21, pp.77-79. 極東鳥類研究会, 美唄.

（高橋伸夫）